

# 「終わり」と向き合うハンセン病患者

——過去の想起と共同性——

坂田 勝彦

本稿の目的は、国立ハンセン病療養所「多磨全生園」で1970年代に入所者が行った生活記録の取り組みをもとに、隔離下に置かれた人々がいかなる社会的世界を構成してきたかを明らかにすることにある。近代以降の日本においてはハンセン病患者を療養所へ収容する隔離政策が進められ、約一世紀に渡り続けられたが、他方で戦後、彼らを取り巻く状況は大きく変化した。特に1970年代以降、ハンセン病の「終わり」といった言葉で、急速に進む高齢化や入所者数の減少とともに、彼らの存在が社会的に忘却されていく状況が深刻な問題として療養所では意識された。全生園入所者はそうした状況と向き合うなかで、それまでの過去を想起し記録として残す試みを進めた。彼らはその試みを通して、全生園とともに生きざるをえなかった者同士の間で共同性を再認し、療養所外の現在／未来における他者との関係性を再構成した。

## 1 問題の所在

### 1-1 対象と問い——「俱会一処」とは何か？

東京都東村山市にある国立ハンセン病療養所「多磨全生園」（以下、全生園と略記）の片隅には、「納骨堂」という名の集合墓がある。かつて「らい」と呼ばれ、今日は「ハンセン病」と呼称を変えたその病いを病んだがゆえに全生園に入所し、亡くなった約3000人以上の人々が現在、その場所に眠っている。

近年、その場所は新聞や雑誌、テレビなどでも取り上げられているが、そのなかでは死後も遺骨という形でさえハンセン病患者<sup>1</sup>が「故郷に帰れない」ことが、彼らに対する差別の象徴として語られる。本稿が目じりたいのは、その墓碑に彫られた「俱会一処」という語についてである。この語には、死後の世界でも共にあるという仏教上の意味を越えて、ハンセン病という病いを病んだがゆえに全生園という場所でも

に生きることになった（生きざるをえなかった）者たちの、自分たちの人生に対する意味づけが託されている。

全生園では園創立70周年を迎えた1979年、入所者自治会が一冊の生活記録集を刊行した。先述の墓碑と同じ名が付けられたこの『俱会一処——患者が綴る全生園の70年』という生活記録集は、為政者のまなざしに規定されてきた歴史を、療養所入所者が自らの手で捉え直していく画期的なテキストであった。このテキストの冒頭には、刊行の経緯がこう記されている。

最古の収容所の故か、（多磨全生園には：引用者注）五十年以上の収容歴を持った者が二十六人いる。入園者はつねに千人を割る傾向にあり、療養者の高齢化とともにハンセン病が終息に向かっていることは、もはや、疑うことのできない現実である。多磨全生園患者自治会は、こうした現実を踏まえ、終わ

りの日に備えて、次の事業を起こした。……患者の手で、多磨全生園史を編集し発刊する。『俱会一処』はこうした事業の一環として、創立七十周年記念に刊行するものである。(多磨全生園患者自治会編 1979: 3-4 下線部、引用者)

1970年代まで、ハンセン病を巡る歴史は専ら為政者によって記述されるものがほとんどであった。それらは病者を危険な伝染病者と一括りに定義し、彼らを療養所へ隔離することを正当化するものだった。だが、ハンセン病療養所入所者は、様々な形でそれまでの過去を想起し、記録する試みを進めていくことで、為政者が描き出す画一的なハンセン病患者像を、入所者各人の個別具体的な経験から再構成することを試みた<sup>2</sup>。なぜ彼らは70年代から80年代にかけてこうした試みを行い、その集大成であるテキストに「俱会一処」という名を付けたのだろうか。

## 1-2 分析視角——過去の想起と共同性

周知のように、近代以降の日本においては国民国家の形成過程を通して、ハンセン病に罹患した者を他の健康者と弁別し、療養所へ隔離するハンセン病政策が形成された。具体的には、浮浪患者の療養所への収容を目的に制定された1907年の「癩予防ニ関スル件」に始まり、30年代以降に展開された「無らい県運動」と呼ばれる官民合同の運動を通して、在宅患者も含む全ての病者に対する社会からの排除と療養所への隔離が進められた。

ハンセン病というカテゴリーが日本の近代化の過程で産出されたものであったがゆえに、ハンセン病を巡る問題、特に隔離政策の形成過程については、国家権力による暴力を告発する歴

史研究が焦点を当ててきた(藤野 1993 2001: 澤野 1994)。これらの歴史研究は、国家権力が隔離政策を推進したことを明らかにしたが、ハンセン病を巡る問題群を隔離政策が存続した事態に集約して議論してきたため、大きな問題を抱えている。それらは約一世紀に及ぶ療養所の在り方を静態的なものと捉えるとともに、ハンセン病患者を受動的な被差別者と一元的に把握し、病者の営みについては差別事件を告発する権力闘争に還元して理解してきた。

だが、すでに多くの論者が指摘するように、ハンセン病患者の経験は「被害」や「人権侵害」という表現によって一様に説明し尽せるものでなく、彼らの営みは権力闘争に還元できない広がりを持つものである。そして、従来の歴史研究が捨象してきたハンセン病患者による個別のかつ集合的な諸実践を検討する研究も蓄積されつつある(蘭 2004; 有菌 2008 など)。とりわけ本稿にとって示唆的であるのが、A. シュッツの社会的行為論の視点から、療養所入所者の文芸活動を検討した中村文哉の論考である(中村 2001)。

シュッツは人々が生きる社会関係の諸類型の一つとして、同じ時代に存在し、間接的な関係を持つ他者との間で構成される社会関係を「同時代世界(Mitwelt)」という概念で提示した(Schütz [1932]1974=[1982]2006:215-220)<sup>3</sup>。中村はこのシュッツの概念を援用することで、隔離政策下で外部の人々との関係構築の可能性を著しく制限された入所者にとって、文芸活動には想像上の他者(神や記述行為のなかで創造される潜在的な読者)との間に新たな社会関係を構築し、生の意味を豊饒化する可能性が存在していたことを明らかにした(中村 2001)。

だが、1970年代の療養所入所者による生活記録の取り組みは、入所者間における直接的な

社会関係をはじめとして、中村が指摘するものにとどまらない、多元的な社会的世界の構成につながる実践であった。そして、この取り組みを検討するうえで重要であるのが、彼らが直面していたハンセン病の「終わり」という問題である。

次節以降で改めて検討するように、この試みが進められた1970年代初頭、療養所と入所者を取り巻く状況は大きく変化していこうとしていた。隔離政策の下で大部分の病者が療養所へ収容され、その姿が療養所外で見られなくなって久しくなり、ハンセン病に対する社会的関心が大きく衰退するなか、それまで自明のものであった現実が非常に不確かなものになっていくという危機に、この時期、療養所入所者は直面した（有菌2008; 坂田2009）。そのため、自分たちが生きてきたそれまでの経験を問い直し、いかにしてその生を有意義なものとして残していくことができるかが、療養所入所者にとって重要な問題となった。彼らは、本稿が取り上げる生活記録の取り組みなど様々な試みを通して、現実の意味を模索し、療養所内外の現在／未来における他者との関係性を再構成した。

そこで本稿は、全生園入所者へのインタビュー調査や彼らの手記をもとに<sup>4</sup>、1970年代に彼らが行った生活記録の取り組みを検討する。全生園入所者はハンセン病の「終わり」という言葉で表現された当時の問題状況と向き合うなかで、「患者社会」といった言葉で共通のルーツを発見し、それを基点に自分たちが生きてきた過去を想起していった。彼らはそうした試みを通して、療養所内の他者との間にもともにその場所で生きてきた（生きざるをえなかった）者としての共同性を再認していったが、その過程からは、ハンセン病療養所で生きる人々がいかなる社会的世界を構成してきたかが明らかになる。

## 2 「終わり」と向き合う——ハンセン病療養所入所者の1970年代

本節ではまず戦後のハンセン病療養所を巡る変化を考察し、1970年代に療養所入所者が進めた生活記録の取り組みの背景を整理する。

ハンセン病療養所に隔離された入所者は、隔離政策の下、戦前から戦後の長期に渡り、様々な制約が課された生活を送らざるをえない状況に置かれていた。具体的には、乏しい予算のもと、入所者は病身であったにもかかわらず、衣食住から重病者の看護に及ぶ生活全般を「作業」という形で自活することを余儀なくされた。また、施設長に付託された懲罰権に基づく制裁や私信の検閲等の情報統制を通して、彼らの不満は様々な形で抑圧された（日弁連法務研究財団2005; 宮坂2005）。

しかし、多数の報道や研究が明らかにしてきた療養所入所者を取り巻くそうした状況は、終戦後に施行された日本国憲法のもと、大きく変化する。選挙権をはじめとした各種の公民権がハンセン病療養所入所者にも保障され、また新薬プロミンの発明でこの病いが医学的に治る疾患であることが明らかになった1950年代以降、彼らは自らが置かれる理不尽な状況に対して異議申し立ての運動を展開した。特に、各園での大規模なハンストにはじまり、数百名の入所者による国会前での座り込みやデモ活動へ広がった53年の「らい予防法闘争」は、彼らの団結力を園外の人々に示し、療養所で蟄居していることを自明のものとしなしてきた従来のハンセン病患者像を大きく揺さぶった<sup>5</sup>。

戦後に療養所入所者が展開したこれらの運動は、隔離政策の廃止という目的を実現できなかった点で大きな挫折として当時入所者に理解されたが、他方で、徐々にではあるが、入所者の

生活状況の改善を進めていった。具体的には、各種の「作業」を職員のサービスへ切替える「作業返還」や、入所者の所得を保障する「自用品費」の支給、療舎の「個室居住制」への移行などである<sup>6</sup>。療養所からの退所が依然として困難だったことに象徴される大きな制約を残しつつも、1960年代後半以降、入所者に物心両面の自由がある程度保障される状況が訪れるようになった（ハンセン氏病患者協議会編 1977: 119-147）。

他方で、療養所入所者の生活待遇が改善されたこの1970年代という時代は、ハンセン病患者を取り巻く状況が大きく変化していこうとしていた時期でもあった。国策として進められた患者の隔離収容がほぼ「完成」し、その姿が療養所外で見られなくなって久しくなるなか、戦前に形成されたこの病いを巡るまなざしはこの時期、次第に消失しようとしていた。しかし、逆説的ではあるが、そうした事態は彼らに重大な危機として理解されていくことになる。患者の住居の消毒や焼き討ち、家族への迫害を伴って行われた療養所への隔離収容を通して、それまで生きてきた社会関係を剥奪されてきたがゆえに、療養所入所者にとって、自らに向けられた「ハンセン病患者（らい者）」というまなざしは、その生の有様を拘束する桎梏であると同時に、存在をかうじてであっても確かなものにならしめる最後の縁でもあったからである<sup>7</sup>。

加えて、1960年代から70年代にかけてハンセン病療養所では、明治期からの古参の入所者の相次ぐ逝去や入所者の急速な高齢化が進んだが、彼らにとって、そうした事態は状況をより深刻なものにした。入所者の退所や高齢化は他の福祉施設でも生じうる現象であるが、新規の入所者は存在し、そのカテゴリーは再生産さ

れる。だがハンセン病療養所の場合、新規の発病者が希少になっていたため、入所者の減少がそのままハンセン病というカテゴリーの消滅に帰結するという構図が1970年代初頭以降、顕在化してきたのである。シュッツは人々が未来に存在するであろう他者との間に構成する社会関係を「後代世界 (Folgewelt)」という概念で提示したが（Schütz [1932]1974=[1982]2006: 215-220、322）、この時期に療養所入所者が直面したハンセン病の「終わり」という問題とは、「後代世界」の消滅とでも形容しうる危機であったと考えることができるだろう。そのため、ハンセン病というカテゴリーの消滅に直結する入所者数の減少や高齢化、自らの死は、彼らにとって甘受せざるをえない自然的過程である以上に、自分たちが存在していたこと自体の消去に直結する事態として現れたのである（坂田 2009）。

こうした状況下、入所者の間では次第にいかにして「終わり」と向き合うかという問題が、危機感をもって語られた。例えば、戦後の患者運動を牽引した入所者である森田竹二は、1970年代に「死にゆく日に備えて」という回想録を執筆したが、その執筆の動機を自分たちの生き死にまつわる記録を後世に残すためであると語った（『多磨』1971.11:6-9など）。同様に、全生園の入所者自治会は1970年、入所者がどんな生き方をしてきたかを残していくことが「現在の重要な義務であるという観点」から、資料収集を開始した（『多磨』1971.2:2-5）。1970年代初頭以降、ハンセン病の「終わり」といった言葉が繰り返し語られていくなか、各療養所では入所者によって自分たちが生きてきた経験の固有性をシンボライズすることを目的とした様々な試みがなされていった<sup>8</sup>。

### 3 過去の想起と共同性

#### 3-1 歴史を巡る疎外からの解放——『多磨』誌における「聞き書き」の試み

2008年3月まで全生園に開設されていた「ハンセン病図書館」は、当時のそうした状況のなか、入所者によって始められたものである。全生園入所者自治会は1969年、療養所開園70周年（1979年）へ向けて、入所者の手で生活記録集の刊行を企画し、その試みを進める拠点としてこの図書館の前身である「ハンセン氏病文庫」を整備した<sup>9</sup>。入所者からの寄贈や園当局からの「提供」を通して、全生園の第二代園長の林芳信の蔵書や『見張所勤務日誌』をはじめとした施設当局の記録物、入所者の文芸作品など、多数の図書・資料がハンセン病図書館には収集されていった<sup>10</sup>。

だが、資料が集まるにつれて、次第に深刻な問題が浮き彫りになった。ハンセン病療養所では数多くの短歌や俳句、小説や生活記録が入所者によって綴られてきたため、当初、歴史を記述していくための重要な資料としてそれらは期待されていた。しかし、「患者の書くものについては、その通信文も共に神経を使っていた時代だから、生活や医療などの現実の記録の発表など許されるわけがなく、「病院当局が外部に知られたくないことは、手紙を没収するか、墨で消したり、患者を呼び出して叱責するのが普通であった」と、資料収集に携わった関係者が述べたように、かつて、ハンセン病療養所では入所者の日常に様々な形で統制が加えられてきた（小杉1998: 94-105）。特に、逃走防止のため、私信の検閲等が厳重になされ、文芸作品についても、療養所の生活を巡る不満などを綴る記述は許されなかった。そのため、「患者の書いたもの」は貴重な資料であったが、為政

者側にとって都合の良い入所者の姿しか明らかにならないという懸念が関係者に抱かれるようになったのである。資料に刻印された統制の影響を巡って、何が資料であり、またいかにしてそれらから過去を想起するかという問題に、彼らは直面した。

しかし、試行錯誤を繰り返すなかで全生園入所者は、療養所における過去を想起する試みを進めた。まず、それまで入所者の間で語られてこなかった日常の様々な出来事が、口述を通して探求された。この時期、入所者自治会の機関誌である『多磨』では、戦前からの入所者の高齢化と減少を背景に、戦後に入所した若い入所者が編集に携わるようになった。彼らはまず、自らが経験していないかつての療養所の有様を知ることを目的に、開園時から園で生活する古参の入所者への聞き取りを企画した。「【聞き書き】全生園むかし話」というタイトルのその試みは、『多磨』誌上で一年半に渡り連載された（1971.12～1973.7、全7回、5人の入所者への聞き取りが収録されている）が、その企画ではそれまで黙されてきた数々の出来事が人々の語りを通して取り上げられていくことになった。

ある古参の入所者は、従来療養所でタブーとされてきた「溪鶯会事件」について口を開いた（『多磨』1972.2:34-40）。開設から10数年が経過し、制度・人心ともに落ち着きが見られるようになった昭和初期（1933年）の全生園で起こったこの事件は、「院内自治」を標榜する「改革派」と「保守派」の入所者が衝突し、流血の事態に至った。「改革派」は敗れ、院内自治が後退を余儀なくされたこの事件は、その後訪れる戦中・戦後の抑圧に満ちた「暗黒時代」を入所者に予感させるものであり、事件後、何人もの入所者が追われるように園を後にすることになった。この連載では他にも、療養所内で密

売されていたモルヒネの流行や、園内で生まれた私生児の扱いなど、従来、入所者の間に深い爪跡を残してきたがゆえに沈黙されてきた数々の出来事が紹介された。

「ここではね、その、かつてはね、習慣が、そういったこと（自分の経験などを記録に残す）が、なかったんだ。許されなかった」。ハンセン病図書館で開館以来資料の収集に携わってきたYさん（男性、80歳、昭和17年入所）は、1970年代まで療養所では入所者がどのように生活してきたかを記した過去の資料が残されてこなかった背景をこう語る<sup>11</sup>。ハンセン病療養所では長い間表現の自由が制約されたがゆえに、入所者には、自らの経験を自由に語るという営み自体、想定されてこなかった。そのため、自らの語りがたい過去の経験については、現在もそうであるが、当時はそれ以上に、積極的に語りだすことを多くの人々は躊躇せざるをえなかった。

だが、「昔の醜い話など蒸し返さなくてもという声も聞こえるかもしれません」と断りつつ（『多磨』1971.12:24）、戦後に入所した若い編集者たちは「聞き書き」を進めていった。そして、以下で検討するように、「終わり」を前にした当時の状況下で、この試みは語り手-聞き手それぞれにとって大きな意味を持つことになったと考えられる。

例えば、療養所の開設後まもなく全生園に入所者したある人物は、発病から入所に始まり、自らの過去を語りだす。そして、園内での「農作業」や「餅つき」といった日常の出来事を振り返る中で、「それから、こんなこともありました」「こういうこともあったんです」と、記憶の糸を辿りながら言葉を続けた（『多磨』1972.7:35-40）。また、他の語り手たちも「今ではこんなに変わってしまいましたが」と

語りつつ、あたかも語る中で語るべき自らの経験が新たに発見されるかのように、各々の経験から過去の療養所の有様について想起していった。それまで語る必要のないものと考えられてきた自らの過去が、感銘とともに聞き手や連載の読み手に受け止められていくという経験は、1970年代の問題状況のなかで自らがその場所で生きてきたことの意味が不確かなものになろうとする危機に直面していた入所者にとって、その存在を何らかの有意味な形で残していく営みとして理解されたのではないだろうか<sup>12</sup>。

この取り組みは、聞き手として関わった者にとっても大きな意味を持っていた。『多磨』の編集者だったAさん（男性、64歳、昭和39年入所）は「あれはね、ほんとに楽しかったね」と振り返る<sup>13</sup>。当時、ハンセン病療養所は大きな変化に直面していた。病気が医学的に治癒した人々の中からは療養所を退所する人々が現れ、また退所はできないまでも、園外へ「労務外出」という形で出稼ぎに出る人々が多数現れるなか、療養所内は身体に重度の障害を抱える退所困難な人々が取り残され、自治会の運営さえ立ち行かない状態になっていた（多磨全生園患者自治会 1979:221-227）。聞き手たちは、「新しい道の扉は、古きものへの模索から開けるといふ観点」をこの試みを進めていくなかで自覚していったと語る。そうした彼らの言葉からは、これからいかにして生きていかななくてはならないか模索せざるをえなかった聞き手に、この試みが何らかの指針を与えるものとして期待されていたことが窺われる（『多磨』1971.12:24）。

この連載の企画者は「みにくい傷跡でも、すべてをさらけだし、厳然と存在したという歴史的事実を、いま記録しておかなければ、高齢化が進む療養所の中で、永久に埋もれてしまうことを恐れ」、この取り組みに着手したと語った

(『多磨』1972.12 編集後記)。「毎回、この『聞き書き』を楽しみにしています」といった反響が寄せられるなか、この試みは続けられた(『多磨』1972.5: 23-27 など)。その後も全生園では同様の聞き書きや自分史が綴られていくが<sup>14</sup>、それまで沈黙されてきた経験を語る - 聞く、綴る - 読むという相互行為のなかで共有するこうした試みを通して、全生園入所者は過去の療養所の有様を彼ら自身の経験から捉えなおしていったと考えられる。

### 3-2 私的な想起から構成される集合的記憶 ——光岡良二「『多磨』五十年史」

そして、さらに注目されるのが、この数年後(1979年)に入所者自治会の刊行する生活記録集『俱会一処』の作成に中心的に関わった人物である光岡良二が行った、「書誌『多磨』50年史」(1971.12～1975.9、全44回)と呼ばれる試みである。この書誌はそれまでの全生園の機関誌に例のない約四年という長期の連載であり、以下で検討するように、様々な反響を呼び起こしていった。患者運動の中心として活動してきた光岡は、いわゆる「ハンセン病文学」を代表する書き手の一人でもあった。彼はその創刊50周年記念の企画として、それまで幾度となく寄稿した機関誌の書誌の執筆を引き受けることになった。この連載を通して光岡は、書かれたものから療養所という場所における「過去の声」を聴く試みを進めていく。彼はその初回に執筆を巡る関心を、こう綴っていた。

機関紙「多磨」が通巻600号の齢を数える。その前身「山桜」時代を含めての号数である。三十頁及至六十頁の片片たる小雑誌であるが、それが五十余年を越える年月の間、廃刊されることもなく一貫して発行され続け

てきたことは、考えてみれば驚くべきことである。もちろんその背景には全生園という一施設が存続し続けてきたという条件があったからであるが、つぎつぎに人の移り変わる患者集団の中によほどの積極的な自己表現のエネルギーがなければ、この持続は創り上げられなかっただろう。六百冊の片片たる小雑誌の集積は、それなりに歴史の証言であり、かけがえのない重みを持っている(『多磨』1971.12:6)。

彼は連載の初回で『山桜』創刊号を取り上げたが、その際、機関誌が「半紙を袋とじにした用紙に孔版印刷で二〇頁の小冊子」で始まり、重い病状を抱えながら編集に尽力した無名の人物たちによって支えられてきたことを紹介する(『多磨』1971.12: 6-11)。誌上の作品を考察するなかで光岡は、自らも幾度となく寄稿したこの雑誌が、療養所で生きてきたそれら無名の編集者や書き手たちの協働を通して約半世紀に渡り刊行され続けてきた過去を想起する。

また、この連載では各作品の内容を追うなかで、入所者が置かれてきた状況が描きだされた。かつてハンセン病療養所では、様々な形で入所者の生活に圧力が加えられていた。光岡はそうした状況を反映する作品として、戦前期の文芸を代表する小説「御国の為に」に注目した(『多磨』1972.8: 34-39)。全生園の機関誌では毎年「文芸特集号」と題打ち、入所者から作品を募ったが、初回の第一等に選ばれたこの小説は、徴兵検査で発病が発覚し、戦地から強制的に送還される青年の葛藤を描いた作品である。主人公は療養所に入所する過程で、健康な者が戦地に赴くのと同様に、療養所への入所が病者である自らの「国民としての務め」であることに気付いていく。光岡は、「御国の為に」をは

じめとした皇国戦勝を歌う作品の数々や、自らが発病を機にいかにも悲惨な境遇へ零落したかを嘆く「発病物語」など、機関誌の作品群からは「強制隔離政策の現実」が浮き彫りになると語る（『多磨』1972.12: 33-38）。私信の検閲や施設管理者による制裁措置等、ハンセン病療養所で入所者は長らく自由を抑圧され、施設側の望む入所者像を「絶対的な所与として」受け入れることを余儀なくされた。「筆者自身」と自らの経験も参照しつつ、光岡は社会から隔絶された場所で入所者が直面してきたかつての状況を想起する。

こうして光岡は明治期から順々に機関誌の書誌の記述を進めたが、途中で「筆を進めながら、自分の書いているものが、その本来の語義どおりの書誌というものとも違うことに気付いてきた」と、ある迷いを抱く。そして、こう自問した。

私の書こうとしているものは何なのだろう。私を突き動かしてこれを書かせている衝動は、実際は非常に私的な、内的なものであることに気付く。私の手の届くところに偶然残されている、その多くは死者の言葉を通して、過去を追体験し、過去を私の内部に構築しようとする情熱といったらいいのかもしれない。……このドラマが私をどこにつれていくのかいまは分からないでいる。自分の前にある表現体である遺物がもっている必然性に従って、出来るだけ受身に、それらの遺物が語りだす言葉に耳を澄ませて聞こうとしている（『多磨』1972.5:6、下線部、引用者）。

いつの間にか「私的な、内的な」ものになっていたと吐露するように、光岡は自らが綴るものが当初考えていた書誌と大きく異なるものになっていることに戸惑いを覚えた。戦前の療養

所を知り、機関誌の執筆者でもあった彼は、この書誌を綴る際、必然的に自らの療養所における経験を文脈として参照する。そのため、書かれたものの文脈、具体的には、知己のある作者や折々の療養所の状況へ記述を広げることになった。その結果、この試みが書誌にとどまらない、ハンセン病療養所における過去の有様を想起する営みとなっていたことに気付いたのである。彼は後に、自らが想起しようとしているものを過去の療養所における「患者社会」であり、その「ドラマ」であると表現した（『多磨』1974.3:33）。

では、なぜ光岡は自らが想起しようとしている過去をそう表現したのだろうか。そうした疑問を考える上で示唆的であるのが、機関誌に一切記載がない先述の「溪鶯会事件」に多くの紙幅を割いた際、彼が先のものと同様の当惑を口にしていたことである。光岡はこの事件を取り上げる理由について、事件が自らの入所後すぐに起こったものであったにも関わらず、「病院内の一切の事情にまだ馴れない私」にさえ「事件当時の雰囲気は、強烈な印象として残っており、「病院史における一つの時代の曲がり角」であったからだと言う。そして、そうした理由があくまで「私事」であると断りつつ、この事件を巡る沈黙の背景にある「あらゆる対人関係の網の目の複合」こそ「患者社会」の姿を呈示するものであるがゆえに、自分は取り上げなければならないと語った（『多磨』1972.9: 4-9）。

先述の「聞き書き」などでも言及された、かつての療養所における入所者間のこの内紛は、光岡の連載以外でも様々な形で取り上げられていくが、「終わり」を前にした1970年代にかつての内紛であるこの事件が入所者自身によって繰り返し綴られたことから、そうした事件を取り上げること自体、綴る当人たちにとって、

重要な意味を持っていたことが窺われる。なぜなら、対立や葛藤は人々に「社会」を生きる経験をもっとも生々しい形で体感させる事象であるからである。取り上げられた当の事実とは反対に、この出来事を綴る営みを通して、彼らはハンセン病療養所という場所でもにある「社会」を生きてきた「ドラマ」を現在のものとして想起していったのではないだろうか。

また、彼は連載を通して、いわゆるフィクション性の強い作品、とりわけ詩を頻繁に紹介した。「患者社会」の「生活現実」を窺うことができる作品として、彼は自らがかつて綴った「伝説」という名の詩を引用した。

ふかぶかと繁った樫の森の奥に／いつの日からか不思議な村があった。見知らぬ刺をその身に宿した人々が棲んでいた。その顔は醜く、その心は優しかった。刺からは薔薇が咲き、その薔薇は死の匂ひがした。／人々は土を耕し、家を葺き、麴を焼いた。琴を奏で、宴に招き、愛し合った。こそ泥ぐらいはありましたが、殺人も姦通も、売笑もなかった。女たちの乳房は小さく、ふくます子はいなかった……幾百年か日が巡り、人々は死に絶えた。最後の一人は褐色の獅子神になった。廃れた家々にはきづたが覆ひ、彼等の植えた花々が壮麗な森をなした。主のいない家畜らがその陰に跳ね回った（『多磨』1974.8:28／は引用者）。

ある空想の「村」の存在を詠んだこの詩は、巧みに社会から隔絶されたハンセン病療養所と入所者を連想させる表現で綴られている。人々の間で集合的記憶が構成される具体的な過程を検討したM. アルバックスは、一見個人的なものに見える記憶が、優れて社会的なものである

ことに注目している（Halbwachs 1950=1989:4-19）。この指摘を踏まえると、療養所における「患者社会」を想起しうるものとして、機関誌に掲載された無数のノンフィクションだけでなく、自身が個人的に思い入れのあるこの詩を引用した光岡の選択からは、彼が表現しようと試みた過去が所与の实在ではなく、療養所で生きてきた各々の個人的な想起を契機に構成されていく集合的な「ドラマ」であったことが明らかになる。

そして、光岡が自らの過去を想起するなかで綴った「患者社会」という「ドラマ」は、他者に読まれることで、読み手との間で共通の過去として共有されていく。例えば、この連載は読者から様々な反響を呼んだ。それは、「今一番期待を持っていますのが、光岡良二氏のエッセイです」という期待にはじまり（『多磨』1971.5:23-27、1972.2 編集後記）、彼が綴った出来事や人を実際に知る経験者からの情報提供や事実誤認の指摘など多岐に渡ったが（『多磨』1972.12:36、1973.3:32）、こうした読者からの反響に光岡自身、「本稿、少なからぬ好評の声を聞くが、好評にせよ悪評にせよ、読者の生き生きとした反応が得られることは作者の幸福である」と手ごたえを書き記している（『多磨』1972.12:36）。こうして、「『多磨』五十年史」は当初の予定だった1年を遥かに上回る約4年もの間続けられた。その展開からは、書き手の想起を介して綴られたものがそれを知る（経験した）者・知らない（経験していない）者に読まれ、彼らの想起を喚起していくことで、ハンセン病療養所という場所で人々が相互に関わりあう中である「社会」をともに生きてきた過去が、彼らの間で今・ここにあるものとして共有されていったことが伺われる。

以上、本節では「聞き書き【全生園むかし話】」と『多磨』五十年史」という二つの試みを検討した。ハンセン病療養所では1970年代から80年代に多数の「聞き書き」や自分史が綴られた。語る-聞く、綴る-読むという相互行為のなかで自らの経験を振り返っていくことで、彼らは各人の想起から構成される複合的な過去として、「患者社会」という「ドラマ」を共有していった。

### 3-3 テキストが想起させる過去——『倶会一処——患者が綴る全生園の七十年』

「書誌『多磨』五十年史」の連載終了後、光岡を中心に約二年間に及ぶ準備を経て、園創立70年を記念する生活記録集『倶会一処——患者が綴る全生園の七十年』が入所者の手で刊行された。ここまでの議論を押さえた上でこのテキストを読み直すと、それが1970年代に全生園入所者が行った試行錯誤の結晶であることが明らかになる。

まずその内容を見ていくと、このテキストは全4章から構成されており、「檻の中へ」(第一章)「人と習俗」(第二章)「飢えと戦争」(第三章)「開放期の相貌」(第四章)と題されている。それぞれ、明治中期から後期、大正から昭和初期、戦中・戦後、現在(高度経済成長期)と、大きくは時系列と対応しているが、通史的区分ではなく、各時期に療養所で入所者が営んでいた生活の有様を反映する題が付けられている。そうした構成からは、それまで公的に刊行されてきた通史とは異なる、入所者の目から見た療養所の有様を綴るといふこのテキストに託された意図が窺われる。

このテキストの刊行に携わった入所者は、作成の過程で、「施設の沿革」等の歴史が隔離政策に関わった者たちによって多数出版されてき

た一方で、それまでの七十年の間に入所者が「どのように生き、どのように死んだかをまとめたもの」が「何も残されていない」ことに違和感を強く覚えたという(小杉1998: 94-99)。前節でも検討したように、ハンセン病患者を取り上げた従来の記述物の多くは、病者がいかに危険でかつ社会において忌避される存在であることを強調し、彼らの隔離収容を正当化する「救らい」を基調としたものであり、為政者に都合のよい病者像しか描かれてこなかった。彼らは自分たちが療養所という場所で生きてきた過去の有様を描くため、それまで公的な記録では記されてこなかった様々な出来事、例えば賭博や窃盗、外部との密取引など、醜い傷跡であってもあえて取り上げた。このテキストの作成は、彼らにとって、他者による意味づけに包摂されない形で、療養所における過去を捉えなおしていく実践だったのである。

さらに、このテキストを考える上で重要であるのが、その作成が多くの入所者による共同作業を通して進められたことである。例えば、その有様は「築山」という項目(第一章、第25節)の記述から見ることができる(多磨全生園患者自治会編1979: 57-60)。全生園の入所者であれば誰もが一度は登ったことがあると語るその小高い丘は、今日では「望郷台」という名で園外の人々にも広く知られる場所となっているが、工事の経緯など、その場所を巡る記録は当時まで一切残されてこなかったという。だが、入所者の誰もが知るその場所の、それまで知られてこなかった過去が、実際にその場所の造成に関わった者とその経緯を知らない者との相互行為を通して、このテキストで明らかにされた。療養所外との接触がほとんどなかった時代、多くの入所者はせめて園外を眺めることのできる場所があればと、高台を作ることを願っていた

と、語り手は振り返る。施設側はそんな入所者の希望を利用し、逃走防止用の堀の掘削を入所者が行うことの見返りとして、その残土を積み上げて丘を作ることを許可した。入所者の約2年に及ぶ工事によってこの丘は造成されたという。

それまで語られてこなかった過去が数少ない経験者によって語られ、その語りが聞き手によって綴られる。それが聞き取りの場を離れ、他の人々にも読まれることで共有されていく。このテキストは語る - 聞く、綴る - 読むという相互行為を通して、療養所における過去の有様を、年齢や境遇の異なる入所者が共有することを可能にしたのではないだろうか。

このテキストの作成で採用された方針も、非常に特徴的なものであった。具体的には、「高齢者や古い職員の話を片っ端から聞いて歩き」、「前後のつながりなどかまわずに、面白いお話ならなんでも拾い集めて『エピソード全集』のようなものを作る」という方針である（大竹1996: 501-504）。

このテキストの編集に携わったSさん（男性、80歳、昭和16年入所）は、その背景に、ある「失敗」があったと語る<sup>15</sup>。彼を含むこのテキストの編集者はそれぞれ、その二年前に刊行された患者運動の記録集『全患協運動史』の作成にも携わっていた。『全患協運動史』は、患者運動の代表的な出来事を選び出し、時系列をおって整理したテキストであったが、そうした構成は結果としてその内容を、いわゆる記録集に往々にしてみられるような「大味なもの」にしてしまったと、彼は語る。その「失敗」と「反省」を活かし、『俱会一処』では入所者によって「生き（られ）た歴史」を描き出すため、「とんぼの目」のように多角的な視点から、一見すると些細なものに見えるような出来事まで、様々なトピックスを盛り込むことが編集者の間で確認

されたという。全生園を代表する事件から、「お会式」「夏祭り」といったかつての療養所における習俗、日常生活のために欠かせなかった「火や水」「虫取り」まで、雑多な、けれども日常の中で営まれてきた無数の出来事がこのテキストには収録されている。

また興味深いのが、そんな日常の中に散在する出来事の数々から構成されているこのテキストを手取ることで、彼らが自らの知っている／知らない過去を想起する機会があることである。

現在、全生園で入所者に過去の出来事等について話を伺うと、彼らは自らが知らない、あるいは記憶が曖昧な事柄に話が及んだ際、近くにある『俱会一処』に手を伸ばし、出来事や事柄を確認した上で、それらに付言しつつ、自らの経験を語りだしていくことがある。例えば近年、全生園の一角には数百本からなる桜並木があり、近隣地域から花見客がやってくる名所となっている。その由来についてある入所者へ話を伺った際、彼は『俱会一処』を紐解きながら、入所後に自らが取り組んだ植樹の経験や思い入れを語った<sup>16</sup>。療養所であった代表的な出来事だけでなく、様々な出来事が一見すると散乱しているかのように多数収録されているこのテキストは、読み手を現在から過去の想起へ誘う入口となっている。

そして、『俱会一処』の序文ではこのテキストが、ハンセン病療養所という場所で生きてきた「人間の実験記録」であり、日本の将来の「医療と福祉」に重要な教訓を与えるものであると宣言されている（多磨全生園患者自治会編1979:5）。そこからは、どこかにいるであろう現在の／未来の読者にこのテキストが何らかの形で読まれること、また、将来において療養所外の人々に自分たちがいかなる存在として記憶されていくかを、彼らが想像していたことが窺

われる。雑多なエピソードから構成されるこのテキストを作り上げていく営みは、彼らにとって、療養所という場所で生きてきた自分たちの存在を後世に残していく試みであり、「後代世界 (Folgewelt)」を構成していこうとする実践であったと考えられる。

最後に、このテキストの表題に「俱会一処」という語が付けられた、その意味について考えたい。その表題の所以を記した以下の文章からは、全生園入所者が過去を想起するなかで、ある関係性を構成していったことが明らかになる。

標題を『俱会一処 (くえいっしょ)』とした……仏教典中の語で、浄土とともに会うという意味のようであるが、この語から、そうした宗教的意味を消して、このらい園に吹き寄せられて来て同じ運命をともに生きる人間集団を象徴する語と見ても、ふさわしく、なかなか良いと思ひ、この表題を選ぶことにした。(多磨全生園患者自治会編 1979: 7-8)

自分たちの存在を「この園に吹き寄せられて来て同じ運命をともに生きる人間集団」と形容するその言葉は、以下のことを示唆している。様々な形でそれまでの経験を捉え直し、記録していくことを通して、全生園入所者が自らの生きてきた生の意味を、まさにこの場所で同様の過去を他者とともに生きてきたという一点を核に特徴付けていこうとしていたこと、そして、過去を想起し、共有していくなかで、この場所とともに生きてきた (生きざるをえなかった) 者との間に共同性を再認していたことである。

以上、本稿は 1970 年代に全生園入所者が行った生活記録の試みについて検討した。ハンセン病の「終わり」という言葉が繰り返し語られ

た 1970 年代の問題状況と向き合うなかで、彼らは過去の経験を振り返り、記録する営みを通して、自らが生きてきた生の意味を再構成し、療養所内の他者との関係性を模索した。人々の間で取り結ばれる何らかの「縁」を想起させる「俱会一処」という語が付された一冊の記録集と、それに連なる様々な生活記録の試みからは、時代とともに変化する全生園入所者を取り巻く状況と、彼らが過去を想起することを通して再認してきた共同性の有様が示されている。

#### 4 おわりに

当事者をして、周囲でこの 10 年余りの間に起こった出来事は驚くべきものだったという。「もう、昔だったら、信じられないね」。全生園入所者の多くは、様々な新聞や雑誌、テレビなどでハンセン病を巡る問題が取り上げられるようになった今日の状況についてそう語る。1996 年の「らい予防法」の廃止に始まり、98 年の「国賠訴訟」の提訴と判決、それらに前後して高まった社会的関心など、ハンセン病を巡る状況は近年大きく変化した。それはかつての「救らい」から社会問題としての「告発」へ、ハンセン病を巡る言説の構造が急激に転換した事態であった。

この間、ハンセン病療養所の有様もまた大きく変化した。『俱会一処』の刊行から 30 年を経過した今日、全生園入所者の平均年齢は 80 歳に迫り、その数は当時の約 3 分の 1 以下に減少した。そうした状況下、2008 年 3 月末、入所者の高齢化とそれに伴う担い手の確保の困難を主な背景に、「ハンセン病図書館」が閉館となり、収蔵されてきた資料は納骨堂と近接する「国立ハンセン病資料館」に移管された<sup>17</sup>。長年に渡って入所者自身の手で運営されてきたその図

書館の閉鎖は、療養所という場所で生きてきた人々の個別具体的な思いを含み込む過去が、療養所外の匿名の他者にも分有されるべき歴史へ変わっていくプロセスが現在進んでいることを示唆しているのかもしれない。

ハンセン病図書館の終わりをどこか予感しながら、そこで長年資料収集に携わってきたある入所者は、以下のような言葉で自らの想いを綴った。

ハンセン病の歴史を伝えていくためには、資料を残さなくてはならない。残された資料には、必ずそこに生きてきた人の歴史がある。隔離された生活を強いられた人々、患者たちが互いに支えあって生活をしてきた姿がある。……私はこのところ、あえて言うならしきりに、「隔離による文化」というのを考えている。諸外国には見られない、日本だけの隔離されたがゆえに生じた文化（「バリアフリー図書館を——隔離による文化の行方」『ハンセン病文学全集』第4回配本「月報」、2003年3月）。

本稿は、全生園入所者が行った生活記録の取り組みを検討した。1970年代初頭以降、ハンセン病の「終わり」といった言葉で、急速に進む高齢化や入所者数の減少に起因する諸状況が全生園では深刻な問題として現れた。彼らはそうした状況と向き合うなか、自らが生きてきた過去を想起し、記録として残すことで、入所者間における共同性を再認した。その後、彼らが残した生活記録は研究者をはじめとした療養所外の人々との架け橋となり、90年代以降の社会的関心の高まりに大きな影響を与えてきた<sup>18</sup>。それら生活記録を介して、彼らと療養所外の現在／未来における他者との間には社会的世界が

確かに構成されてきたのである。

はたして、かつて図書館に所蔵されてきたものなど、全生園入所者による生活記録が今後いかなる形で読まれ、新たな歴史記述を生んでいくか、現時点で知ることはできない。だが、それらに刻印された共同性の痕跡は折に触れて、手に取る者に、過去の声として現前し、全生園で生きてきた人々の生について、何かを想起させていくのではないだろうか。

## 注

<sup>1</sup> この病気に罹患した者は、医学的に治癒した後も、偏見や差別のため発病前と異なる生を生きざるをえない状態が続く。本稿はそうした患者の経験を汲み取るため、この呼称を用いる。

<sup>2</sup> 療養所入所者による生活記録の試みは、本稿が取り上げる以前にも、1950年代半ばに複数刊行されている。産業社会学者の永丘智郎やマルクス主義文学者の堀田善衛らが執筆指導にあたった『深き淵から』は代表的なものである（堀田・永丘[1956]2002）。ただ、それらの試みは彼ら療養所外の知識人のコミットメントに拠るところが大きかったがゆえに、そうした関わりが低減するにつれて、1960年代に入ると、退潮していった。また、自らが生きてきた経験を綴ることが「生きてきた証」を残す営為であるといった記述意識がそれらでは希薄である点も、本稿が検討する1970年代の試みとは大きく異なっている。

<sup>3</sup> A. シュッツは、人々が生きる社会関係について検討するなかで、その理念型として、4つの社会的世界を提示している。具体的には、同時代を生きる匿名の他者との世界（「同時代世界 Mitwelt」）、直接に対峙している他者との世界（「直接世界 Umwelt」）、既にこの世を去った他者との世界（「先代世界 Vorwelt」）、未来に存在するだ

ろう他者との世界（「後代世界 Folgewelt」）である。シュッツは、人々の生きる社会的世界がそれら複数のものから成ることを指摘した（Schütz [1932]1974=[1982]2006: 215-221）。

<sup>4</sup> 本稿は、資料として主に多磨全生園入所者が自治会機関誌『多磨』等に綴った手記や全生園入所者へのインタビューをもとにしている。手記については、引用するものそれぞれに（雑誌名 西暦。号：頁）を記した。また、インタビューは2004年8月から継続的に進めている調査の一部である（現在まで、全生園入所者の男性36人、女性11名、退所者の男性12名、女性3名にインタビューしている）。なお『多磨』について補足すると、ハンセン病療養所各園では戦前から入所者が機関誌を発行してきたが、『山桜』の題で発行されたこの雑誌はその最古のものであり（1919年～）、戦後に現在の名に改題され（1952年）、今日まで続いている。なお、資料には今日差別語とされる表現もあるが、資料が示す意味を表すため、そのまま用いた。

<sup>5</sup> 結核患者の運動組織である「日患同盟」の代表を長年務めた長宏の回顧、日本の難病患者の組織活動を分析した山手茂の研究、いずれも、ハンセン病療養所入所者の運動のラディカルさと意義を高く評価している（長 1974; 山手 1979）。

<sup>6</sup> ハンセン病療養所では自給自足が是とされ、入所者の収入は「作業」賃や「療養慰安金」等に限られていた。厚生省（当時）は1971年、患者運動による再三の要求により「自用品費」を制度化する。これは拋出制国民年金の障害年金額に相当する制度であり、この制度の成立までハンセン病療養所入所者の所得保障は低い水準に抑えられてきた（全国ハンセン氏病患者協議会 1977: 111-131）。このほか、重度の後遺症等を抱える者の看護を入所者による「作業」から職員によるサービスへ切り替える「作業返還」、雑居生活から個室生活へと入所者の住環境が改善されたのも、1970年代以降のことである。

<sup>7</sup> 例えば、全国のハンセン病療養所には多くの詩人がいたが、その代表的人物である島田等は1964年に「らい詩人集団」という名の団体を結成した。その団体は綱領で、「私たちは詩によって自己のらい体験を追及し、また詩を通じて他者のらい体験を自己の課題とする」と宣言している（島田 1985）。ハンセン病療養所では短歌や俳句、詩が数多く詠まれているが、その少なくない作品が「らい」あるいは「ハンセン病」を病んだがゆえに刻印された人生の負荷を詠ったものであることは、彼らにとって、この病いを巡る思索がそのまま自己の生を思考することと直結するという構図の存在を示している。

<sup>8</sup> 「全国ハンセン病療養所入所者協議会」が刊行した記録集『復権の日月』の巻末では、入所者による出版物の代表的なものが年毎に列挙されている（全国ハンセン病療養所入所者協議会編 2003）。それによると、1970年代だけでも30冊以上の「年史」「記録」が出版されている。

<sup>9</sup> 「ハンセン病図書館」が創立された経緯と長年資料整理に携わった入所者の経験については瓜谷（1998）が詳しい。付言すると、全生園内には戦前から「図書室」があり、入所者が自由に語り合い、読書することが可能だった貴重な空間であったという。だがその場所は戦後、いつの間にか「物置小屋」と化していたと、ある入所者は回想する（『多磨』1972.4:9-11）。アジールから「物置小屋」、<sup>10</sup>「物置小屋」からアーカイブへ位置づけが変わってきたその場所の歴史からは、時代とともに変化してきた療養所の有様がうかがわれる。

<sup>10</sup> それらには『退院逃走通知簿』や『見張所勤務日誌』など、入所者への統制行為が克明に記されたものが多数あった。そうした資料を入所者が手に入れられたことは、彼らの精力的な資料収集の有様とともに、当時それらに記された事実が「人権侵害」にあたるものとは管理者に想像さえされていなかったがゆえに管理が嚴重ではなかったことを示唆している。

<sup>11</sup> Yさんとの2007年12月10日のインタビューより(全生園の「ハンセン病図書館」にて)。

<sup>12</sup> 1990年代後半の「国賠訴訟」期にハンセン病療養所でフィールドワークを行った蘭由岐子は、自らが居合わせた場で、それまでの痛みや過去を語りだす療養所入所者の姿と、その語りを持つ間身体的な共感を喚起する力について記述している(蘭2003)。時期の違いは踏まえなくてはならないが、その場に立ち合う人々に語る-聞くという相互行為がいかなるものとして経験されるかという問題は、本稿の分析するものとも相通じるところがあるように思われる。

<sup>13</sup> Aさんとの2008年11月3日のインタビューより(全生園の「コミュニティ・センター」にて)。

<sup>14</sup> 全生園の場合、『多磨』誌上の連載だけでも、「回顧・らい予防法闘争」(小杉敬吉)、「泪橋」(国光哲緒)、「柁の垣根の思い出」(国分正礼)などがある。

<sup>15</sup> Sさんとの2009年3月4日のインタビューより(全生園の「福祉会館」にて)。

<sup>16</sup> Bさん(男性、82歳、昭和16年入所)との2007年

12月20日のインタビューより(全生園のBさん宅にて)。

<sup>17</sup> 最終的に、そこに所蔵されていた資料等は全生園内にある「国立ハンセン病資料館」(2007年にリニューアルオープンされた博物館で、前身は「高松宮ハンセン病記念資料館」)へ移譲された。

<sup>18</sup> 歴史学研究者の廣川和花は、近年のハンセン病を巡る問題の関心の背景に、1970年代以降に患者運動や療養所入所者による多数の記述物と、それらを通して構築されてきた歴史観があると指摘する(廣川2006)。事実、入所者による記述物とそれらを集積してきたアーカイブは、1990年代以降のハンセン病を巡る運動に不可欠なものであった。1990年代初頭にハンセン病問題の研究に先鞭をつけた医学史家の山本俊一、「国賠訴訟」等の運動の中心として活動した藤野豊らはいずれも、その著書の作成がこの図書館での資料調査をもとにしていると語っている。また、ハンセン病図書館には、そこで資料調査を行って書かれた論文がそれらの著者によって寄贈されているが、その数は約100冊以上に及ぶ。

## 文献

蘭由岐子, 2003, 「差別をめぐる語りと「わたし」の位置取り——訴訟期ハンセン病療養所でのフィールドワークから」好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房, 19-46.

———, 2004, 『病いの経験を聴き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社.

有蘭真代, 2008, 「国立ハンセン病療養所における仲間集団の諸実践」『社会学評論』59(2):331-348.

藤野豊, 1993, 『日本ファシズムと医療——ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店.

———, 2001, 『いのちの近現代史——「民族浄化」の名のもと迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版.

Halbwachs Maurice, 1950, *La memoire collective*. Albin Michel ed (= 1989 小関藤一郎訳, 『集合的記憶』行路社)

廣川和花, 2006, 「ハンセン病問題に関する歴史研究の現状と課題——『歴史評論』2004年12月号特集『ハンセン病と隔離の歴史を問う』」『歴史科学』183:11-18.

堀田善衛・永丘智郎編, [1956]2002, 『深き淵から——ハンセン氏病患者生活記録』新評論.

小杉敬吉, 1998, 『あの人・この人——ハンセン病療園に60年今はなき療友たちに捧げる追憶の記』.

中村文哉, 2001, 「内面世界に広がる社会関係——A・シュッツの社会関係論からみたハンセン病の意味世界」『山口県立大学社会福祉学部紀要』7:83-102.

長宏, 1974, 『患者運動』世界思想社.

- 大竹章, 1996, 『無菌地帯——らい予防法の真実とは』草土文化.
- 多磨全生園患者自治会編, 1979, 『俱会一処——患者が綴る全生園の七十年』一光社.
- 坂田勝彦, 2009, 「戦後日本の社会変動とハンセン病者による現実の意味構成——ある都市部療養所における『ふるさとの森』作りの取り組みから」『社会学評論』59(4):769 – 786.
- 澤野雅樹, 1994, 『癩者の生——文明開化の条件としての』青弓社.
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Verlag Springer ed. [Suhrkamp 1974] (= [1982] 2006, 佐藤嘉一訳, 『社会的世界の意味構成——理解社会学入門 [改訂版]』木鐸社).
- 島田等, 1985, 『病棄て』ゆみる出版.
- 瓜谷修治, 1998, 『ヒイラギの檻——20世紀を狂奔した国家と市民の墓標』三五館.
- 山手茂, 1979, 「難病患者の組織と行動」保健・医療社会学研究会編『保健・医療の組織と行動』272-292.
- 財団法人日弁連法務研究財団, 2005, 『ハンセン病問題に関する検証会議——最終報告書』.
- 財団法人全生互惠会, 『山桜』『多磨』(1919. ~ 2008.7 各号).
- 全国ハンセン氏病患者協議会編, 1977, 『全患協運動史——ハンセン氏病患者の闘いの記録』一光社.
- 全国ハンセン病療養所入所者協議会編, 2003, 『復権の日月——ハンセン病患者の闘いの記録』一光社.

(さかた かつひこ 筑波大学人文社会科学研究科、ksakata@social.tsukuba.ac.jp)

(査読者 市野川容孝、香西豊子)

## Facing the Vanishment, Associating the Community

Hansen's Disease Sufferers in Japan and the Practices of Making Their Own History since the 1970's

SAKATA, Katsuhiko

This article examines how the Hansen's disease sufferers have constructed the social world through the practices of making their own history since the 1970's. The isolation policy for the people who were infected with Hansen's disease was established through the formation of the nation-state since the beginning of the modern era in Japan. This isolation policy segregated the Hansen's disease sufferers from the general public and confined them to the sanatoriums. Meanwhile, the environment around the Hansen's disease sufferers had radically changed amongst the post-war Japan. Especially from the early 1970's, the inmates of "Tama Zenshouen" faced "the end" caused by their aging and death of fellows. The crisis meant that the meanings of their lives were vanishing. So, they set forward to reminding and recording their experiences in the sanatorium to resist the crisis. From this research, we can understand that through the practices they have reconfirmed their vanishing community and constructed relationships with the people outside the sanatorium.